報道発表資料

橿原市

平成 30 年 7 月 6 日

報道関係者　様

橿原市教育委員会事務局　文化財課

藤原京右京五条六・七坊発掘調査出土の三彩片

要旨

平成 29 年 7 月 20 日～同年 11 月 17 日に実施した、藤原京右京五条六・七坊の調査で唐三彩片が出土した。藤原京では 2 例目の唐三彩で、枕としては初の出土例である。本資料は藤原宮期（奈良文化財研究所の時代区分に準拠する）に日本にもたらされたものと考えられ、日本における唐三彩出土例では最も古い例の一つとして、重要な資料である。調査地の周辺には、実態の分かっていない寺院「山本寺」の存在を想定する研究があり、この寺院に関わる遺物である可能性もある。

平成 29 年度に橿原市四条町で実施した藤原京右京五条六･七坊調査出土の三彩片について、以下のとおりに報道発表を実施致します。

＜本件に関する問い合わせ先＞
橿原市教育委員会事務局　文化財課
橿原市川西町 858-1
TEL：0744-47-1315（直通）
担当：杉山

調 査 地：橿原市四条町 44-7、44-9、54-3、55-3・4、56-2、57-4
調査期間：平成 29（2017）年 7 月 20 日　～　平成 29（2017）年 11 月 17 日
調査面積：576.0 ㎡
調査原因：道路拡幅（市道　慈明寺町・四条町線事業）
調査機関：橿原市教育委員会

発掘調査成果

調査地は藤原京右京五条六坊西南坪・七坊東南坪である。検出した遺構には①藤原京に関わる遺構、②鎌倉時代の遺構がある。藤原宮期の遺構は西六坊大路や溝・柱穴・土坑が検出されているものの、その東西に広がる宅地部分では明確な建物や塀などの施設は無く、宅地の利用状況は判然としない。鎌倉時代の遺構は耕作溝のみであり、都が平城京に遷されて以降は田畑として利用されていたようである。

三彩片は鎌倉時代に掘られた南北方向の耕作溝から出土した。藤原京の条坊呼称では、出土位置は藤原京右京五条七坊東南坪である。

出土した三彩片について

本資料は**枕（ちん）**の一部と考えられる。縦 2.6cm・横 4.3cm・厚さ 0.5cm である。表面は平滑で全面に白・緑・茶色の釉が斑状に施されている。上端が水平である点、釉薬が流れている点、表面に文様が無い点の 3 点から、枕の側面部分と判断できる。裏面は摩滅し、器面の調整や枕組立て時に粘土板同士を貼り付けるのに使った「どべ（粘土）」の痕跡は残らない。本資料の胎土分析の結果、胎土の成分元素の割合が奈良三彩と異なる特徴を示し、国産品（奈良三彩）ではないことが明らかとなった（※）。白色釉は透明、胎土は精緻でやや赤みを帯びるといった特徴から、河南省付近で製作された唐三彩である可能性がある。

今回の調査では、唐三彩の製作年代と対応する時期の遺構は藤原宮期のもののみである。このことから、本資料は藤原宮期の遺物と判断できる。

三彩片出土地点の特徴

唐三彩は、国内では都城跡・官衙跡・寺院跡・古墳で出土する傾向がある（参考②）。

今回調査を実施した場所は南に神武陵・北に綏靖陵と 2 つの陵墓に挟まれる立地条件ではあるが、各陵墓からは離れている。また、発掘調査地点は東南坪の中央南寄りにあたるが、建物遺構が存在しないことから、大規模な邸宅や公的施設も想定しがたい。近隣には大窪寺が存在することや、実態は不明であるものの、神武天皇陵の隣には「山本寺」という古代寺院の存在を想定する研究もあり、本資料も寺院に伴う遺物である可能性がある。

藤原京内での唐三彩出土の意義

今回の唐三彩出土は藤原京で 2 例目であり、枕出土例としては初例となった。また、唐三彩の持ち込まれた時期が藤原宮期と考えうる貴重な例であり、日本で出土した唐三彩としては最古の事例の 1 つとなる。

藤原宮期における日本への搬入ルートは複数考えられるが、遣唐使が日本に持ち込んだとする

と、大宝の遣唐使（702 年出国 704 年帰国）があてはまる。また、出土地点から、実態が不明である「山本寺」との関連も想起できる。日本最初の都城藤原京の意義を考えるうえで重要な成果であると言える。

—参考①　唐三彩とは—

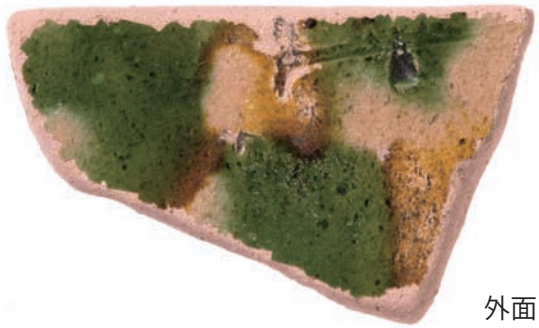
唐三彩は唐代(7 世紀～9 世紀、日本では飛鳥時代～平安時代)に製作された陶器の一つである。白・緑・茶・藍の 4 色の色釉を斑状に施釉するのが特徴である。胎土には水簸(すいひ)した精緻な白色粘土を用いるが、胎土が赤みを帯びる例や素地に化粧土を施す例もある。白色釉は無色透明もしくは濁った白色で、釉は白く抜け、胎土が透けて見える。壺、坏、鉢、盤、鍑(ふく)、硯等の器、人物や動物を象る俑(よう)、枕等の種類があり、中国では「明器」として墓から出土する例が多いが、都城や寺院でも出土している。

—参考②　舶載の施釉陶器出土例（古代）—

唐三彩は 1998 年の集成（愛知県陶磁美術館『日本の三彩と緑釉』）では全国約 50 遺跡で出土例があり、その多くが都城跡や官衙跡・寺院跡で、飛鳥時代の例が最も古い。奈良県内では 13 遺跡で出土例があり、平城京跡での出土例が最多となる。中でも、官寺である大安寺跡からは約 40 個体以上の唐三彩枕が出土している。平城京内の性格の分かる出土遺構では、長屋王邸や藤原麻呂邸といった邸宅で坏等の食器が出土している。枕は寺院・宮跡・公的施設から出土している。藤原京内では、邸宅と想定される右京二条三坊で俑が出土している。また、三彩ではないが、下ツ道の東側溝（近隣には役所？）で二彩硯が出土している。なお、古墳出土の例も 3 例あり、県内では斑鳩町竜田御坊山 3 号墳で陶棺内から硯が、県外では群馬県多田山 12 号墳の前庭部から枕が、長崎県双六古墳の副葬品として二彩の坏が出土している。

遺物の調査は、奈良市教育委員会埋蔵文化財調査センター　三好美穂氏・原田憲二郎氏
奈良県立橿原考古学研究所　菅谷文則氏・岡林孝作氏・廣岡孝信氏・木村理恵氏・杉山拓己氏
大阪市立東洋陶磁美術館　出川哲朗氏・小林仁氏
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　玉田芳英氏・尾野善裕氏・森川実氏・
大澤正吾氏・廣瀬覚氏・神野恵氏・丹羽崇史氏・小田裕樹氏・山藤正敏氏にご協力いただいた。
遺物の科学分析は、奈良県立橿原考古学研究所　奥山誠義氏・河﨑衣美氏・小倉頌子氏にご協力いただいた。

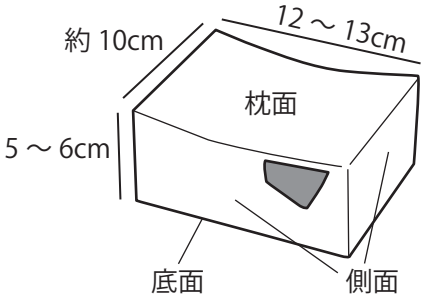
※奈良三彩の主成分分析成果については、橿原考古学研究所の小倉氏が日本文化財科学会第 35 回大会・2018 年度総会で報告されており、ご教示いただいた。



外面

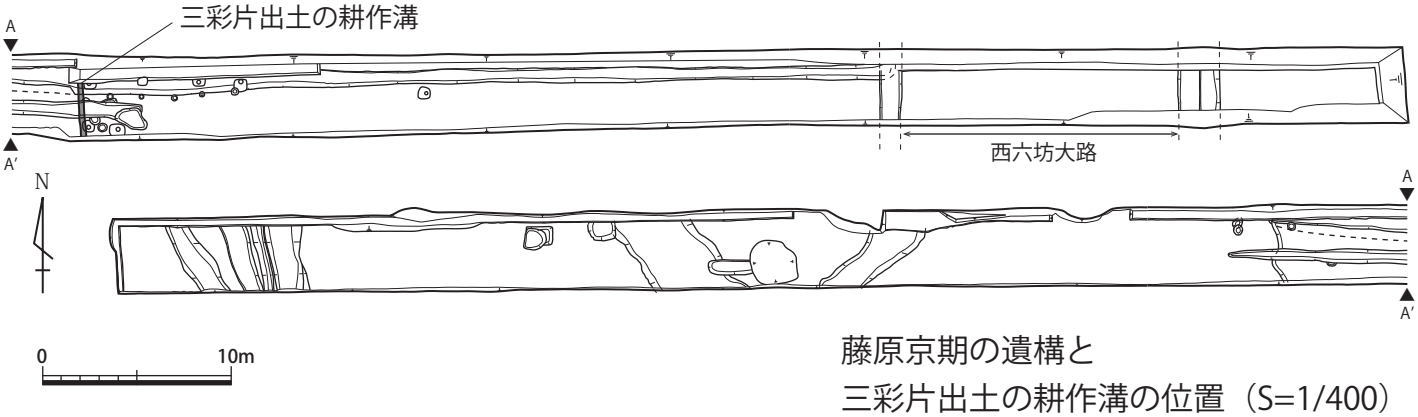
内面

藤原京右京五条六・七坊出土の三彩片

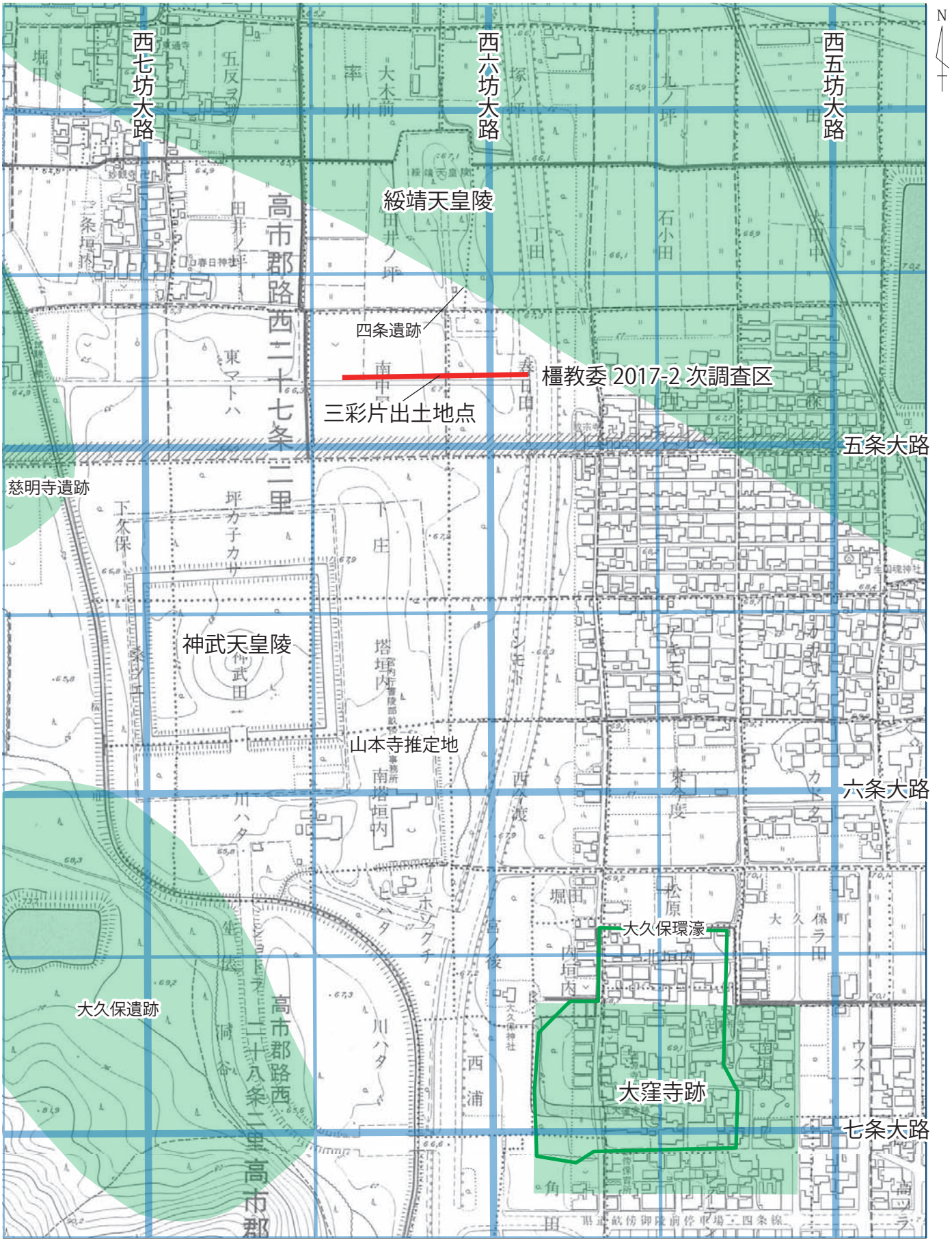


三彩片の部位・枕の大きさ
（イメージ）

唐三彩　枕（大安寺出土）
（奈良文化財研究所　蔵）



藤原京期の遺構と
三彩片出土の耕作溝の位置（S=1/400）



(S=1/4,000)

調査地と周辺の遺跡

調査地とその周辺（東より）